

公益財団法人 竹中大工道具館

船大工 ー三陸の海と磯船ー

開催期間：平成28年3月26日（土）～平成28年5月22日（日）



【企画展の内容・目的】

- 人が海に生きる手段をどのように獲得したのか。海に生きる人達が海から何を学び、それを如何に技術（船、道具）へと導いたのかを考える展覧会。
- 和船は各地で異なる特徴・構造を持つ事を紹介する事によって、各地の海的环境や特徴・漁法が違うということを知る機会とした。
- 和船の製作実演を通じて、道具・構造・神事などの視点から外国人船大工が解説することにより、日本人でも気付きにくい和船文化の優れた点や、人と海をつなぐ和船の役割、人と海の共存の歴史を再認識する機会とした。
- 和船の製作工程に合わせてワークショップや神事などの様々な関連行事を行い、幅広い世代を対象に海と和船文化に親しんでいただく機会とした。
- 造船儀礼である航据の儀や船卸しなど、海や船に纏わる儀礼を紹介し、人々が古くから抱いてきた海への感謝や畏敬の念について知る機会とした。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成 28 年 3 月 26 日（土）～ 5 月 22 日（日）
- 開催場所：竹中大工道具館 1F ホール
- 入場者数：8,542 人



竹中大工道具館 外観



企画展会場 入口



海と生きる暮らし



都市を支えた海運・三陸の海の恵みと脅威

「海と生きる暮らし」の展示として、和船全盛期であった昭和 40 年代の岩手県山田町の風景を紹介し、海から得られる水産物が貴重な食料資源となり、海外交流の起点ともなっていたことに触れた。そして、それが江戸時代から綿々と続いていたことを、各地の名所図会を用いて紹介することで、日本全国に海と生きる暮らしが根付いていたことを気づかせる展示とした。

「都市を支えた海運」では江戸末期の航路図を紹介し、航海法の書籍や磁石と共に展示することで海から陸地を見る視点をイメージさせる内容とした。海からみれば三陸と瀬戸内の距離感もわかり、各地の産物が和船により運ばれ列島経済の活発化や文化の交流をもたらしたことが分かる内容となった。しかし、海は恵みを与えてくれるだけではなく、時には脅威となることを「三陸の海の恵みと脅威」の展示で触れた。三陸の豊かな暮らしが震災でどのように変わってしまったのかを岩手県大槌町の写真で紹介した。それでもそこで生活していかななくてはならない人々の海とのつながりを意識させる展示となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



展覧会は鉦始めと航据の儀ではじまりました



神仏への祈り

日本各地に残る神事には海に纏わるものが多い。「板子一枚下は地獄」海洋を相手とする漁労は常に危険と隣り合わせであるが、それでもそこで生きていかななくてはならない生業である。その危機感から安全と大漁を祈願する信仰が根付き、日本の地域文化をつくり上げた伝統行事となっていることを知るため、造船作業の工程に即して神事を行った。

造船工程では一般に鉦始め・航据の儀・筒立祝・御神入れ・船卸し祝と司るが、展覧会の初めに鉦始め・航据の儀を行い、関連事業として進水式までを実施した。



見て学ぶ。最近の子供にとって、こういう機会はとても大切なことだと思われる



特設造船場



船を造る



いろいろな和船

造船に関わらず、現代社会では安全管理のため建設現場が公開されることはなくなってしまった。かつて工事は生活の中で目にする日常であり、職人と接する機会は子供の成長にも大きな影響を与えていた。本展覧会ではそんな作業場を展示場の一角に特設会場として設置し、大工と気軽に会話できる場とした。来館者は大工の作業を見て学ぶことができ、且つ展示場でそれまでの経験についての解説も聞くことが出来る構成となっていた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



和船のかたちと木工の歴史



和船のかたちと木工の歴史・和船模型

世界的にみても独自の進化をしてきた和船について、その歴史を解説する展示を行った。常設展示とリンクするポイントを示すことで、木工技術の発展が海で生活することの技にどのように活かされたのかを総合的に理解できるように新規に年表を作成した。また、年代ごとに代表的な船の模型を展示することで、その技術が実際にどのような形に反映されたのかを見ることができ、その使われ方や背景についても思いが馳せられるように工夫している。



船大工の道具



船大工の道具・いろいろな和船

独自の技術で造られていた和船であるが、作り方だけではなく、それを作るための道具も独自の進化を遂げたものであった。特に、製材鋸と和釘普及が不可欠であったことを解説し、常設展示の木工技術史コーナーで展示される石斧と鉄斧による伐木、打割製材、大鋸製材模型とのリンク表示を付け、さらに付帯事業でも実際に体験できるようにした。建築を造るための道具とは似ている部分もあれば、当然異なるところもある。その違いに気づき、何故そうなっているのかを考える内に、海と共に生きることの工夫を知ることが出来るのである。



東北の船大工



師から弟子へと受継がれる技

和船造りには設計図が無く、大工の経験に基づき造られていた。当企画展にて外国人船大工がそれまで口頭によってのみ伝えられていた設計図を図面に残し、製作実演・解説することで、人と海を結ぶ和船文化の重要性や継承の意義を語る機会をつくった。さらに、東北で実際に教えを受けた師匠にもご参加いただき、師弟間で受け継がれる技がどのようなものなのかに触れることが出来た。釘差しの穴埋めの位置や形が変わってきた理由や造船コストを抑える工夫は、海で生きる人の生活を支えるための知恵そのものであった。

【来館者の声】

- 海と人とのつながりはずっと続いていくこと。また、昔の人が海から教わった技術や進歩を伝えていかなければならないことを学んだ。
- 日本国は周囲全て海にかこまれた島国なので、もっと海等に関して興味を持って学ぶべきだったと思っています。
(特に5年前の東北大地震の津波の被害を目の当たりにして…)
- 人間の生活にとって海は切っても切れない関係であり、豊かさとも危険とも、長い間常に向き合ってきたことを感じた。
- 海のことを思えば、山のこと地のことを考える必要があると改めて思いました。何が大切かをよく考えることが必要だと思いました。
- 造船から見る海が、いままでもっていた海のイメージを大きく変えました。
- 海育ちですが、船についてそこまで意識したことはありませんでした。今回の展示に触れ、場所によって船が違いうようにいろいろな海があるのだとわかった。
- 江戸時代、海運業の発達により都市が支えられていたことを改めて知った。日本は海に囲まれ、海の恵みに大きく支えられている。我々の生活と海が切っても切れないことがよく分かった。私たちは周りの自然とともに生かされている。大切にしなければならぬと思いました。
- 海はそこで行き止まりではなく、人の通る道、好きな方向へ進んで行ける大きい道なのではないだろうか。
- 「海」は私たちにとって「商い」の対象ですが、やはり母なる海、として自然の大いなるものだと感じております。
- 海という広くて怖い一も持っている大きな存在に対して、魂の入った職人技をもって船をつくる人と、その船に乗る人、自然を敬う人の心を感じました。
- 海と人との関わり地域、経済、ゴミ問題について考えさせられました。

2. 関連事業の内容

■特別講座「船大工が語る海」

【開催日時】 ①平成28年3月27日(日) 13:00～15:00
②平成28年4月 3日(日) 13:00～15:00
③平成28年5月 1日(日) 13:00～15:00

【開催場所】 竹中大工道具館 特設会場またはB2F 木工室

【参加者数】 ①43人 ②50人 ③50人 (合計143人)

【実施内容・目的】

- アメリカ人船大工とその師匠である陸前高田市の船大工に三陸の海と船について話を聞き、また下記工程について実演と体験しながら実践的な技術に触れる機会とした。(第1回:「板図と墨付け」、第2回:「焼曲げ」、第3回:「擦り合わせ～擦鋸と釘差鑿」)

世界でも特異な進化を遂げた和船の技術。その元は人々が海とともに生きるための術であることを知り、実演・体験により海の環境の違いや適する船について学ぶ企画です。船大工と直に触れ、さらにその師弟関係を学ぶ。外国人船大工が残り伝えなかった人と海を結ぶ和船文化の重要性や継承の意義を知ることが目的に行いました。



第1回「板図と墨付け」
講師：ダグラス・ブルックス、
久津輪 雅（岐阜県立森林文化アカデミー）



第2回「焼曲げ」
講師：村上 央（村上造船所）
ダグラス・ブルックス



第3回「擦り合わせ～擦鋸と釘差鑿」 講師：ダグラス・ブルックス

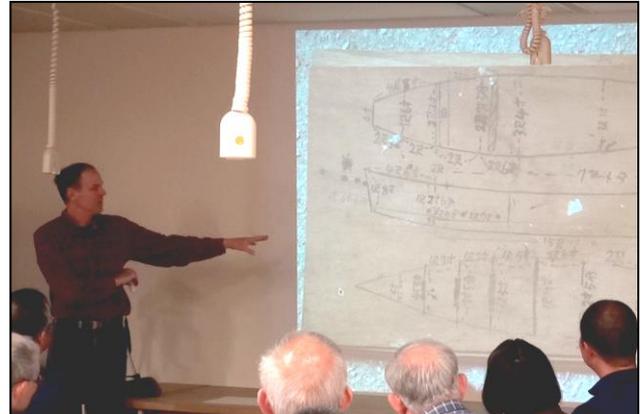


※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

第1回はダグラス・ブルックス氏による船の設計に関する話を聞く「板図と墨付け」。海の環境の違いによって適応する船の形は様々です。その違いがどのように船の形に反映されるのか。日本各地で6人の師匠について造船を習ったブルックス氏は、これまでの経験を交えて説明しました。外国人船大工から見た日本の海と和船。その驚きは日本人にとっても新鮮な目線であり、あらためて和船の優れた文化に気づき、船によって人と海とが共存してきた歴史を再認識する機会となりました。



木工室が特設会場となりました。



ブルックス氏による講義の様子

板図を用いた設計技術の解説をしています。この他にも、各地の船の形とその意味やつくりかたに関する話がありました。



講義に先駆けて自己紹介をお願いしました。船や海が好きな人、木工に関心がある人、専門の研究者でも古代から現代に渡って幅広い層の方にご参加頂きました。

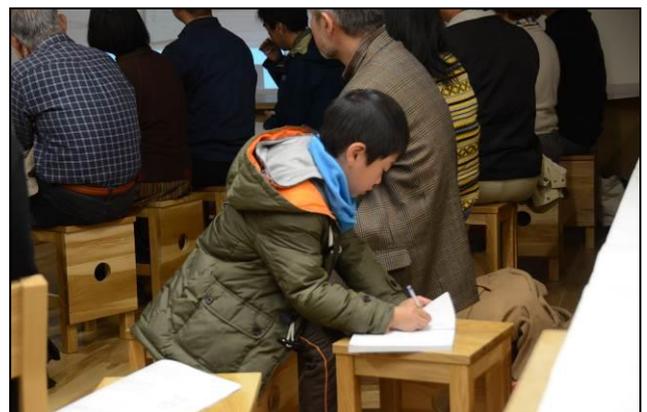


多様な参加者であったため、さまざまな視点から活発な質問がありました



少し難しい内容もありましたが、子どもも熱心に参加していました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



第2回は、外国人船大工から見た日本の海と和船とその造船技術について、地元漁師に「神さま」呼ばれた船大工師匠とともに話を聞く「焼曲げ」でした。造船過程でもっとも緊張するといわれる工程ですが、実演者ブルックス氏の師匠である村上央氏に実際に作業をしながらお話を伺えたので、とても分かりやすく理解することが出来ました。



特設会場の様子

焼曲げは火を使うため、屋外の駐車場を利用して特設会場を設置しました。



治具の構造

通常は造船所で行う作業ですが、治具がなくとも工夫して行えます。出張して作業することが多い東北ならではの知恵といえます。



柄杓で水を掛ける

タイミングよく水を掛けていくことで、板を燃やさずに曲げることが出来ます。材料の変化（曲がり具合）を見分けながら火加減と錘の調整をしていくところに難しさがあります。



「触っても大丈夫だ」

底には火を焚いているのに表面は手で触れるくらいの温度でした。



南三陸の船大工村上央氏にお話を伺いました。海で生きることの難しさと工夫に質問が尽きることはありませんでした。「津波がすべてを変えてしまいました」のお言葉に胸が詰まる思いがしました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

第3回は、和船造りの特徴的な技術である擦り合わせと舟釘を打つ「擦鋸と釘差鑿」のワークショップを行いました。世界でも特異な進化を遂げた和船の技術。その元は人々が海とともに生きるための術であることを知り、実演・体験により海の世界の違いや適する船について学ぶ機会となりました。



特設の造船所で講義を行いました



講義は実演を踏まえて行いました。伝統工法と東北の違い。何故そうなったのかを考察しながらの解説となりました。



参加者による釘打ち体験の様子



参加者による擦り合わせ体験の様子

【来館者の声】

- 山から切り出された木を海に浮かべるための技術から、山と海とのつながりを感じました。
- 海があるから異地域と交流ができる。普段は海と無縁だが海にかかわることを知りたくなった。(建築や文化等)
- 造船から見る海が、いままでもっていた海のイメージを大きく変えました。
- 地域によって様々な条件の海があること。
- 各地で海に寄り添って人が暮らしてきたということを感じた。そのような暮らしぶりを様々な角度からより知りたいと思う。

■神戸開港 150 年記念イベント「和船進水式」

【開催日時】平成 28 年 5 月 7 日（土）13:00 ~ 16:00

【開催場所】神戸港（メリケンパーク）

【参加者数】200 人

【実施内容・目的】

- 実演で製作した和船（磯船）の進水式を行い、最終儀礼である船卸しに参列する機会をつくり、磯船と高瀬舟の乗船の体験乗船を行った。

造船作業においては鉦始め、航据、船卸しと神事を司るが、その中で山の神、場の神、海の神にお伺いをたてることの意義が継承されていた。ところが、今ではこうした神事は港町神戸においても既に形骸化されつつある。そこで、本展覧会ではこうした神事を実際に執り行いながら造船作業を進めていくことで人々が海とともに生きていくことの意味を再認識する機会をつくった。

船卸しを行ったメリケンパークは神戸港を代表する中心地であり、そこを管轄する生田神社から筆頭神官以下 8 名の宮司で神事が行われた。それは単に進水式としての儀ばかりでなく、港を納める神官が海に祈りを捧げる意味も込められていたのである。こうした和船の進水式がこの地で行われることはないかもしれない。参加した人それぞれの心の中に和船の風景が刻まれることになった。



予定通り完成した船。前夜に御神入れが行われました。



白布に包まれ、静かに入水の時を待つ船。



大工も、手水で清め、入場します。



「船卸し」の儀は地元生田の神様が納めます



神楽と巫女の舞が奏上されました



進水の儀



神戸市、館長、大工による神酒の儀



いよいよ進水です



まずは大工自らが試乗して安全を確認しました



高瀬船の乗船体験も行いました



近年の船の間を和船が行く姿は感動的です



神戸港停泊中の日本丸と高瀬舟

■「技と心」セミナー「船のかたち ヨーロッパと日本の造船技術の違いについて」

【開催日時】平成28年5月15日（日）13:00～15:00

【開催場所】神戸海洋博物館 多目的ホール

【参加者数】111人

【実施内容・目的】

- 和船研究の第一人者である神戸大学名誉教授の松木哲先生と、永年松木先生と共に研究に携わってこられた六甲学院の金田隆先生にご登壇頂き、人が海で生活することについて、世相と道具発達史を絡めながら海と船の歴史についてお話し頂きました。

製材鋸が伝わり、釘の使用が一般化するにともない進化した和船のかたち。その後の近代化の過程で導入されたネジの技術がどのように船を発展させたのか。ヨーロッパの船と比較することで、技術の発展について幅広く考える講演会を行いました。

講演会場には神戸港に面する海洋博物館の多目的ホールを使わせて頂きました。木への感心が強い当館の来館者を海の博物館へ誘い、海洋博物館の来館者にも木と船大工の技の世界を知って頂くことを期待しました。そのためか質問も多岐に渡った充実した内容となりました。諸外国と異なる和船技術の形成とは何か。ヨーロッパや他のアジアの船の構造と比べてみることで理解を深め、世界の海は地域により環境や船の構造が違うことや、日本独自の和船と海との関わりの歴史を学ぶ機会となりました。



会場は神戸海洋博の多目的ホールです。



会場の様子



金田隆先生の講演



金田先生には主に各国の事例と歴史のお話をして頂きました。



松木哲先生の講演



松木先生には和船の特徴について体系的に総括して頂きました。



自論を展開され、かなり専門的な内容の質問をなさる方もおられました。



松木先生に丁寧にご回答頂き、難しい内容にも拘らず深く理解することが出来ました。

【来館者の声】

- 木造船で外洋に出た外国と沿岸で生きてきた日本の違いがおもしろいと思った。
- 船の造りかたでも、各地域の技術、用途によって方向性が大きく異なっており、興味深く学ぶことが出来ました。
- 講演内容から、消えゆく和船の理由や特徴がよく分かった。時代の決断としてやむを得なかったのかもしれないが、もし政府が和船の性能を評価していたらどうなっていたのだろう？日本の木造技術が変わっていたのでは？と感じました。
- 和船と欧船の違い。スケルトン、構造船へと移行した今日、ご先祖の丸木舟が天然資源に恵まれた贅沢品で豊かな時代であった事、日本の沿岸船として役だっていた事、木（板）の価値が生活を支えていたのですね。海と木の関わりに気付かされたのが、大きな気付きでした。木材の天然資源としての価値は大きかったのですね。
- 海について知識を広め、海と共生し、自然体で接して地球環境を守るという共に生きることを学びました。
- 日本はもっと海の活用に力を入れるべきと学んだ。

■「ちょこっと木工」期間特別企画「木の船をつくろう！」

【開催日時】「ちょこっと木工」（道具館ワークショップ）開催日時に応じる

【開催場所】竹中大工道具館 B2F 木工室

【参加者数】197人

【実施内容・目的】

- 木で小船を作って遊んでいた世代のボランティアスタッフが中心となって考案した模型を工作する木工体験を開催しました。

企画展の連動企画として、「知る」「つくる」「遊ぶ」をテーマに、日常に行われている木工ワークショップ「ちょこっと木工」の期間特別企画として、「木の船をつくろう！」と「木の船で遊ぼう！」を開催しました。

展示会場で船大工と接し、いろいろな船とその歴史を見ていけば、おのずと自分でもやってみたくなります。「木の船をつくろう！」では、かつて子どもの頃木船をつくって遊んでいた世代のボランティアスタッフが総力を上げて木工キットをつくり、そのノウハウを子供たちに伝えようと頑張りました。時が経つのも忘れて没頭できる楽しく学べる企画となりました。



館内の木工室はいつも賑わっていました



小学低学年から参加できるモーターボートと少し難易度の高い中高学年用の帆掛式の和船を用意しました。



小学低学年とはいえ、鋸・槌・鑿を使う本格的なもので、バランスをとらないと真直ぐ浮かびません。いつの間にか船の基本を考えるようになります。



玩具の船ではあっても、実際の造船を目にしているからの体験です。大板の曲げ構造を踏襲するなど、内容は本格的です。いくつかの試作を繰返し、制限時間で完成できるよう治具も各種開発しました。



キットを開発した本人自らが教えるのですから自然と力も入ります。



「上手くできたかい？」教える方もつくる方も満足です。見てください、この笑顔。

出来上がったらすぐにでも走らせてみたいと思うでしょう。その思いを実際に叶え、楽しんでいる内にさらにいろいろ知りたくなります。屋外に用意した特設プールでは、船の歴史を理解するための簡単な模型、櫂の原理を理解する模型、昔遊んだ笹船や船の模型などを用意し、自ら木工でつくった船とともに浮かべて遊べるスペースを用意しました。ボランティアスタッフと楽しく遊びながら学習できる機会をつくりました。



屋外に特設プールを設置しました。



早速つくった船の試運転です。



もちろん子供たちには大人気なのですが・・・



一番喜んでいたのはお爺さん世代かもしれません



櫓って、どうして真直ぐな棒で船を自在に動かすことができるんでしょう？理屈で説明するより、まずは模型で遊んでみましょう。スタッフとの会話も弾みます。



「あっ、煙出して動いてる！」



スタッフ力作のポンポン船です。
監修の松木先生いわく、「シンプルでいてその原理はとても難しいのです」動力の難しさに触れました。

【来館者の声】

- 実際に作ってみることで、いろいろな工夫に気づき、海と共存してきた人々の思いを感じることができた。
- また海に出たいです。
- 日本は海に囲まれているので船が絶対に必要だとあらためて感じました。

【事業全体のまとめ】

- 本展覧会では、人が海に生きる手段をどのように獲得したのか。技術の原点である「場」をどのように理解するのかという視点から、海に生きる人たちが何を学び、それを如何に技術へと導いたのかを考えることを趣旨としました。
- 道具、構造、神事から特異な和船の文化を学ぶという目的を、展示だけに頼らず、できるだけ体験を通して学べる環境で展覧会を構成しました。
- 和船の製作実演を行い、日本各地で師事した大工の経験を展示し、大工から直に話が聞けるようにしました。また、その師匠にも講義して頂く機会をつくり、師弟間に受け継がれる和の伝統を伝えました。
- 船の展示を中心にしながらも、和船が人と海をつなぐ役割を持つ事や、海の違いが和船の形の差異に表れていることについて紹介しました。
- 海に関わる慣習行事を紹介し、実際に祭事を行って参加できる企画をしました。人々の海への感謝の気持ちや畏敬の念が船神事として今に残っていることを紹介できました。
- 進水式を神戸港で行い、地元の神社にお祀り頂きました。乗船体験も行い、事故もなく無事に遂行できました。
- 木工や舟遊びなどの企画も織り交ぜ、大人から子供まで楽しめる企画展に出来ました。海と船を通して、世代と職種を超えた幅広い交流の場をつくることが出来ました。
- 計画時に想定した入館者数には及びませんでした。リニューアルオープンした昨年度と比しても遜色ない入場者となりました。
- 実演で制作した船は、国立民族学博物館に寄贈し、国有財産の民俗資料として活用されることになりました。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 兵庫県教育委員会文化財室	後援。姫路藩和船建造委員会との連携。
2. 神戸市	後援。神戸開港 150 年記念事業としての事業協力。
3. 姫路藩和船建造委員会	情報提供。資材提供。乗船体験協力。
4. 神戸港振興協会	進水式・乗船体験協力。講演会協力。
5. 国立民族学博物館	展示資料提供。製作した船の受入と活用。
6. 神戸大学海事博物館	情報提供。監修。展示資料提供。
7. 新潟県立歴史博物館	展示品提供。
8. 瀬戸内海歴史民俗資料館	情報提供。展示資料提供。
9. ㈱ドキュメンタリージャパン	東北の造船記録映像の制作提供。
10. オクムラボート販売株式会社	情報提供。資材提供。乗船体験協力。
11. 村上造船所	情報提供。資材提供。講演。造船指導。

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. face book	配信回数 21 回、閲覧者数 14,262 人
2. メルマガ	配信者数 2,031 人
3. 日本海事新聞	「船大工の技・魅力に迫る」2016/03/09
4. 大阪建設工業新聞	神戸開港 150 年記念事業「26 日から竹中大工道具館」 2016/03/11
5. 同門 3 月号	2016/02
6. 阪急電鉄 HP	沿線おでかけ情報 2016/02
7. 一般財団法人兵庫県学校厚生会	スマイルポート（学校厚生会公式サイト）2016/03/22
8. Walker plus	2016/03
9. City Life 神戸版	2016/03
10. 削ろう会事務局	削ろう会 第 77 号 2016/03/28
11. 公益財団法人兵庫県芸術文化協会	すずかけ 4 月号 2016/04/01
12. 海事プレス	2016/04/15
13. 神戸新聞	「伝統の和船造りに光」2016/04/17
14. KOBE C 情報 5 月号	2016/04/20
15. 機関紙編集者クラブ	編集サービス 2016/04/20
16. Kiss PRESS web	2016/04/22
17. リビング神戸東	2016/04/23
18. リビング兵庫	2016/04/23
19. 日経サイエンス 6 月号	2016/04/25
20. 有限会社アイシオール	confortmag.net 2016/04/26
21. 神戸新聞（朝刊）	青空主義プラス「貴重な和船の技術紹介」 2016/04/29
22. Kiss PRESS	2016/05/01
23. 東海新報	「最後の現役船大工」が実演
24. せとうち暮らし vol.19	船大工探訪第 5 回「和船の技を世界へ」2016/07

以上